

7) 陰嚢水腫を伴った停留睪丸由来と思われる精上皮腫の1例

川崎 俊彦・佐藤 玲子 (長岡赤十字病院 放射線科)
 秋田 真一
 中島 祐一・森下 英夫 (同 泌尿器科)

陰嚢水腫を伴った停留睪丸由来と思われる精上皮腫の46才男性の一例を報告した。左下腹部腫脹を主訴とし、鼠径ヘルニア・尿道下裂の手術歴があった。左下腹部にやや硬い腫瘤を触れたが、左睪丸・副睪丸は触知しなかった。腹部単純撮影で、左下腹部から骨盤腔内に腰筋影を消失させる軟部腫瘤影を認め、CT・MRI では一部背側に辺縁平滑な充実部を伴う嚢胞性腫瘤を認め、嚢胞部は左鼠径管を通り左陰嚢内に達していた。左停留睪丸由来の睪丸腫瘍の診断にて腫瘍摘出術施行し、病理組織診は精上皮腫であった。同じ様に腹部から陰嚢まで水腫を形成し、鑑別を要する病態として Abdominoscrotal hydrocele を提示し、鑑別点として、その形成が上行性か下行性かに着目し、若干の文献の考察を行った。

8) 腎異形成症の3例

桑原 悟郎・加村 毅
 清野 泰之・椎名 真
 酒井 邦夫 (新潟大学放射線科)

腎異形成症の3例を提示し、同症の画像診断について腹部エコー所見を中心として考察を加えた。腎異形成症は腎発生過程における尿管芽膨大部の障害およびそれに伴うネフロン誘導障害が原因とされており、典型例では肉眼的に正常の腎組織を欠き、腎は大小多数の嚢胞に置き換えられ、腎全体がブドウの房状を呈している。Karen J は、腎異形エコー診断のクライテリアとして 1. 各嚢胞が接するように存在すること 2. 最大径の嚢胞が腎内側にないこと 3. 腎洞が同定できないこと 4. 腎実質を認めないことをあげている。これらは腎異形成症の発生学のおよび肉眼的所見と良く一致している。

鑑別診断として 1. 水腎症, 2. 嚢胞腎, 3. 多房性嚢胞, 4. Cystic partially differentiated nephroblastoma があげられる。

9) 大腸 X 線検査前処置における LACT 液 (ラクツロース) の使用経験

黒川 茂樹・前田 春男 (新潟市民病院 放射線科)
 横山 道夫
 笹川 力・月岡 恵 (同 内科)

注腸X線検査用下剤として、LACT 液 100cc 投与群、

125cc 投与群、150cc 投与群の3群に分け、各群4例ずつ計12例の注腸検査を行い、その安全性、有効性および至適用量を検討した。その結果

- 1) 125cc 以上服用群で残渣が少なくバリウムの coating も良好であり、診断に極めて有効な画像が得られた。
- 2) 150cc 服用群で LACT 液服用後むかつき、嘔吐などの出現が3/4例に認められた。
- 3) 従って 125cc 程度が好ましいと思われる。
- 4) 排便までの平均時間は、125cc 服用群で1.5時間、150cc 服用群では0.6時間と極めて短時間であった。

10) 便潜血法による大腸癌集検初年度の結果

原 敬治・石川 忍 (厚生連中央総合病院 放射線科)
 安住利恵子

平成元年地域住民胃集検に併用して、便潜血大腸癌集検を5272名に行い、要精検率2.4%、精検受診率92%、大腸・直腸癌を14名(発見率0.28%)を発見した。早期癌6名、進行癌8名で、早期癌と小型進行癌がほとんどで全周性進行癌は2名のみであり、便潜血法スクリーニングが、早期癌・小型進行癌の発見にも有効である。

一次精検は被検者の苦痛度や一次精検処理能力から考えて、98%はバリウム注腸造影法で行った。

今後受診者を拡大して、将来的には一日2カ所採便法でより偽陰性例の減少につとめたい。

11) 診療所における消化器診療(第一報)

—早期胃癌200例を中心に—

樋口 義健(樋口 医院)

全国的にみて胃癌の死亡率が昭和35年以来26年間殆ど低下していない。症状があつて訪れるいわゆる外来胃癌の早期癌率が30%台を低迷していることにもよると考えられる。

一方胃集検の早期癌率はここ数年来60%以上を維持している。これらのことにも言及し主として当施設において発見した早期胃癌200例とそれに付随した成績を報告した。胃X線では過去約28年間に胃癌を761例発見し、発見率は3.72%であった。早期胃癌発見率は過去約18年間に胃X線では0.98%、GIFでは3.43%で、諸家の報告と比べて若干良好であった。早期胃癌200例の発見後18年累積生存率は他病死を含めて88.8%であった。